

森林・林業に潜む「喜び」の見つけ方

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 塩田 昌弘



時、意識的に行った作業は、自分では見えていない「現実」を、関係者の言葉から、ただ素直に書き留めてみることでした。これが「問題」を明確に共有することにつながり、解決への流れができました。

「現実」は、同僚やエンドユーザー、後工程の方の何気ない所作の中など、他者の中に隠れていることがあることを知りました。

さて、私が今整理したいと思っている「理想」と「現実」は、森林作業道についてです。「理想」は、その道があることで、普通に森林に通え、通う人が山の魅力を発見し、森林の整備が進むこと。これについて「現実」を見つめ直し、今の自分にできる森林への恩返しを模索したいと思っています。皆さんにとって、森林作業道、どんな存在になっていますか、ぜひ教えてください。

森林・林業に携わる中の「喜び」どんな時に感じていますか？そして、その喜びは、継続していますか？

私は、今までログハウス職人、素材生産現場の作業員、森林管理会社の技術者という立場で計23年、木材や森林に関わる仕事に就いてきました。

思い起こすと、心躍る喜びを感じた瞬間が何度かあり、その瞬間のおかげで、今も森や木に感謝しながら働けているのだと思います。

20代、短く伐った丸太や角材の元と末を見分けたくて、山に入り木を覗いていた時、節で見分けられるような気がして仮説を立て、製材しながら、その確からしさを発見した時のこと、報告すると、元末をそろえる時の迷いが一つ消えると、返ってきた同僚の笑顔。

30代、広葉樹造材後の残材の多さに

もったいないを感じていた時、エンドユーザーが求める最終製品の寸法と、後工程の製材作業を知った上で、造材する機会に恵まれた。曲がった広葉樹を目の前に、理想は直1・6m、最短尺なら1・2mと計算し、チェンソーを回した瞬間、造材した丸太と重なって見えた、エンドユーザーの笑顔。

森林管理の仕事に就いて一年目に感じた「現場で働く人は一年中働けるのに、なぜ、年間を通して事業発注しないのか？」長年、課題に思い続けていたのですが、年間を通して事業発注するメリットを、分かり易く伝えられる数字を思い付き、関係者と共有することで、解決への道筋が見えた40代の瞬間。

どれも、些細な瞬間ですが、私の心

は弾みました。そして、これらの瞬間のおかげで、今まで森林・林業に関わる仕事を続けてこられたと思っています。

なぜ、あんなに嬉しかったのか？先の例の共通点は、「自分の変化（成長）」「効率の向上」そして「他者の笑顔」でした。

一方、決定的な違いもあって、前2例は、好奇心のままに動いた偶然の産物。最後の例は、掴みに行った「喜び」でした。

「問題」を解決するために必要なことは、「理想」と「現実」のギャップに潜む「問題」を顕在化し、解決できる課題を一つ一つ実行すること。よく知られた手法ですが、私はこの「現実」を観るのが苦手です。思い込みが邪魔したりします。ですので、最後の例の

